

遺族として経験した 異状死の現場 ～Ai認定診療放射線技師として感じたこと～

● CLINICAL REPORT ●

医療法人篠原湘南クリニック・クローバーホスピタル 診療放射線技師 | 飯田訓司

兄が自宅で突然死をした。一度は異状死となり、検視に回ったが、Aiとその他の情報のおかげで死因究明ができ、解剖せずに済んだ。私は、Aiの重要性を再認識し、死因究明の結果が遺族に与える影響の大きさを実感した。また、遺族として、診療放射線技師として、多くの事を知り、様々なことを感じた。

My elder brother passed away by sudden death at his home. Our family could avoid dissecting in order to analyze what he died of. Thanks to the Ai, some tests and other information, he wasn't diagnosed with abnormal death. I realized how important the Ai is and how big impact on the bereaved family they have. Through this experience in the process of investigating death, I - as a member of the bereaved family, in the same time, as a medical radiology technician - could learn a lots of valuable things.

兄が突然死

兄は当時47歳。静岡県伊豆市で農家を継ぎ、両親、妻、3人の子供と元気に暮らしていた。20年前にアトピー性皮膚炎で入院歴があり、最近の健診では総・LDLコレステロールがやや高値のみの指摘だった。筋肉質な体型で、趣味のバドミントンを地域住民に教えていた。

2017年12月29日、朝から父と山奥へ農作業に行き、昼に倦怠感と軽い胸痛を訴えて帰宅。兄は「一昨日からの力仕事の筋肉痛と疲れによるもの」と思い込み、中学生の娘に「リビングで少し休む」と声をかけた。その約1時間半後、娘がうつ伏せて動かない兄を発見。別棟にいた両親がすぐに救急要請し、心臓マッサージを始めたが、20分後の救急車到着時JCS-300、その後30分後にドクターへりで救命救急センターへ搬送された。全力を尽くして頂いたが、蘇生は叶わなかった。

病院到着直後の血液検査、感染症検査、尿検査、心エコー等では死因に繋がる異常が無く、全身単純CT(Ai)でも死因確定に至らず、診断結果は『異状死』となつた。そして、警察が介入すると伝えられ、家族は面会できないまま廊下で待つことになった。

私は「パパが心肺停止で大変！ ドクターへりで運ばれた！」と長男から一報を受けた。詳細が解らなかったので、家族歴のある急性心筋梗塞かと思い、心臓カテーテル治療で何とかなるだろうと思いながら、病院へ向かった。しかし、2時間後の電車内で、娘から「パパ、死んじゃった」と一言だけの電話を受け、落胆し、涙が溢れた。

検視が始まる

警察官が犯罪性の有無を確認する為に、家族全員に事情聴取を行い、第1発見者の娘と両親はさらに家宅捜査へと向かっ

た。家族は「犯罪なんてありえない！」と思っても反発する気力も無く、従うしかなかった。途中、駆け付けた私に、警察官が「CTや色々検査をしましたが、死因は不明です。死因究明を希望し、解剖するならば浜松医科大学で1月4日になります。それまでは専門施設で保管となります。検視終了までに、ご遺族様で話し合って決めてください」と言った。そこで私は「診療放射線技師です。Ai認定も持っています。Ai画像を是非、見せてください！」とお願いをした。その返答は「医師に伝えておきます」だけだった。

待つ間、解剖を依頼すべきか葛藤する自分

1. どうしても死因を知りたい。
2. 医療人として、今後の為にも死因究明すべきなのではないか？
3. Aiに何か写っているのではないだろうか？
4. 身体を傷つけたくない。

5. 浜松は遠すぎる(片道150km)、移動がかわいそう。
6. こんな気持ちが6日間も続くのは、家族が耐えられない。
7. 家族は皆、『兄のそばにいたい!』と思っている。

● 検視が終わる

約7時間待ち続けた22時、検視官に「犯罪性なし」と判定され、義姉と私が初めて面会できた。救急医から「一緒に画像を見てください!」と言われ、Ai画像を読影した。私が画像を動かし、陽性・陰性の画像所見を指摘し合い、その他の検査結果、体表所見、警察の調査結果を踏まえた救急医の見解を聞いた。それは所見ごとに全て納得できる説明だった。途中、私は「まさか、お兄ちゃんのAiを読む事になるなんて! こんなことをする為に今まで勉強してきた訳じゃないのに!」と、感情を口にしてしまった。

そして、救急医が「造影をしてないのではとも言えませんが、急性肺血栓塞栓症としか考えられません。しかし、あくまでも疑いです。死因不明として処理しますか? 病名を付けますか? 解剖を依頼しますか?」と言った。私が「先生のおっしゃる通り、急性肺血栓塞栓症で良いと思います。説明に納得できたので、そのまま病名を付けてください。解剖はせずに家に連れて帰ります」と返答し、義姉も同意した。

私はこの時、Aiのおかげで死因究明ができたと実感し、「Ai撮影をしてくれたこと」と「Ai画像を見てくれたこと」への感謝の気持ちを救急医に伝えた。そして、兄は24時に無言の帰宅となった。

● 思いもしない事件が発生

翌朝から多くの方が弔問に訪れた。そして、葬儀の準備に追われていた5日後に事件が起きた。娘が同級生から「〇〇ちゃんがもっと早く見つけていれば、パパは死ななくて済んだのにね」と言う内容の手紙を受け取り、娘はショックで塞ぎ込んでしまった。それを聞いた私達大

人もショックを受け、対応方法の話し合いました。「死因の説明が不十分だった為に、このような解釈をされることになってしまった。まずは、家族全員が『急性肺血栓塞栓症』をしっかりと理解しないといけない!」と結論を出した。

翌日に家族全員を集めて、医師である義兄と私が「肺の動脈に血の塊が詰まり呼吸しづらくなり、脳に酸素が回らなくなって、フラフラと失神して倒れて死んでしまった。もうその段階だと誰の目の前で倒れても助ける事は出来ない。入院患者でも同じ病気で、突然に死んでしまうことがある。エコノミークラス症候群とも言われ、スポーツ選手でもなることがあります。突然死の死因としても多い」などと説明をした。その後、娘は落ち着きを取り戻し、葬儀でしっかりと役目を果たした。

Aiをせずに死因不明で終わっていたら、どうなっていたらだろうか?

1. 遺族をはじめ、周りの方々に死因に関して全く説明が出来ず、皆が腑に落ちない。
2. 「自分の行動の何がいけなかつたのか?」と延々考え、諦めがつかない。
3. 「早く発見していれば助かったかもしれない!」と後悔が延々続き、娘は立ち直れなかった。
4. できれば避けたかった解剖をお願いしていた。
5. 自責の念が強くなり、遺族の精神的に不安定な時間が長引いていた。

● 遺族として感じたこと

1. 死因を何とかして知りたいが、体を傷つけてしまう解剖にはかなりの抵抗感がある。それを押し切って、解剖に出す勇気や気力もその場では失ってしまう。
2. 面会できるまでの長い待ち時間は、疑問、後悔、不安でとても苦痛だった。
3. Aiやあらゆる検査をしてくれたおかげで、解剖をせずに死因究明ができ、死因に納得できて、本当に良かった。

4. 茶毎に付されるまでの間、遺族をはじめ、多くの方々が顔や体に触れ、感情をあらわにする姿を見て、解剖をせずに早く連れて帰る判断は正しかった。

5. 体表観察だけの検視で終わっていたら、死因が急性心筋梗塞となっていたかもしれない。

そうなると、あの事件での娘への対応に困っていただろう。

6. 子供には何が起こるか予測できない。遺族内での情報伝達、見守り、心のケアが大切である。

● 診療放射線技師として感じたこと

1. 今まで、医療安全の観点から「病院サイドを守る、医療紛争処理の為のAi」という意識がほとんどだった。
2. 「ご遺族の為に……」と院内Aiマニュアル等を作成してきたが、Ai撮影後、遺体や遺族に接する機会が無かった為か、診断結果は気になるものの、その後どうなったのか無関心だった。
3. 异状死となった後の検視と調査は、かなりの時間を要する。その間の遺族への配慮が必要。
4. 医学の発展の為に、解剖を勧めるべきだが、実際は地域格差、時間、遺族感情がある為に容易に解剖はできない。
5. 遺族を納得させる為のツールとして、目で見てわかり易いAi画像が最も有効的である。
6. 多種職による、血液・尿・感染症検査等、体表観察、状況証拠、聞き取り調査等の情報があるからこそ、Ai画像の信憑性が上がり、人々が納得できるものとなる。
7. Ai撮影したことを遺族から感謝される場面が、実際に多くあるはず。

● まとめ

1. Aiなどの死因究明による結果は、死因が判明するかしないかによって、遺族の気持ちに雲泥の差が生じる。また『気持ちを整理する時間』『精神的に不安定な時間』がかなり変わってくる。
2. Aiは『遺族を納得させる為のもの』

だけで終わるのではなく、納得の後に『遺族を精神的に助けるもの』『遺族を不測の事態から守るもの』にもなる。

3. Aiの診断技術向上と普及活動への努力は、診療放射線技師の目につかない所で遺族に感謝されているに違いない。
4. 「Aiも生きている人を助ける検査である！」と実感した。

● 終わりに

葬儀から数か月後、私は「兄の死が少しでも人の役に立ち、今の自分にできる事は何か？」と考える様になっていました。そこで目にしたのがAi学会学術総会の演題募集でした。「身内の不幸を題材にするのは、いかがなものか？」と悩みました。しかし、仲の良い医師から「思い出して泣くのも供養の一つだから、いっぱい泣きなさい！」と教わったことを思い出し、この体験を発表する事が、人の役に立ち、兄を思い出すことになり、供養になると思い実行しました。

案の定、スライドを作成しながら、いっぱい泣きました。何もしないよりは遥かに供養になったと自負しています。

そして、Ai学会学術総会のシンポジウムで上記を発表させて頂いた際に、想定外で、Ai情報センター代表の山本正二先生が、スライド上のAi画像で「肺血栓塞栓症で間違いない！」と読影して下さいました。後日、そのことを家族に報告したところ、安堵していました。

私は、学会発表がこんな形で家族の為になるとは思いもせず、嬉しくなりました。